

り。故に前顯の岩谷牛右衛門舊邸に初めて水車を設けたる事など、僅に萬治四年倉月用水下島民の願書あるに依りて知らるゝのみにて、自餘の記録・書札類は火災に罹り、何事も詳細なる事は知られずといへり。

○鍛冶信忠舊邸

延寶の金澤圖に下に載せたる如く描けり。嘉永七年撰の加越能三州刀鍛冶一覽に、東方一段の名列に炭宮兼則、次に陀羅尼勝國、次に伊豫大掾勝國、次に泰平、次に家平、次に炭宮兼春、次に家忠、次に陀羅尼吉家、次に信忠を載せたり。按ずるに、加越能鍛冶系圖及び享保五年の鍛冶由緒帳等には、信忠の名所見なし。若しは家忠の一族ならんか。尙追考すべし。延寶の圖に、鍛冶信忠の邸地を載せられたれば、此の頃此の邸地を賜はりて、爰に居住せしものなり。信忠退去の後、地子町の邸地に屬せしにや。

○牛右衛門橋

金澤橋梁記に、牛右衛門橋油車とあり。改作所舊記に載せたる元祿三年五月の書札に、金澤牛右衛門橋とあり。此の橋は倉月用水川に架けたり。昔岩谷牛右衛門と云ふ人の舊



邸の邊に架けたる故に、牛右衛門橋と呼べり。三州名跡志及び三州志の頭書に、伊藤牛右衛門と云ふ人の邸地より起りたる橋名のよしいへるは、過聞なるべし。按ずるに、藩士伊藤牛之助といふ人は、利常卿の頃ありしかど、牛右衛門といふはなし。岩谷を伊藤と聞き誤りたるもの也。

○牛右衛門橋町

元祿三年金澤火災記に、牛右衛門橋町と見え、同九年地子肝煎裁許附にも、牛右衛門橋町と記載す。又同十一年の書札には、牛右衛門橋町とも或は安房守殿町牛右衛門橋とも載せたり。按ずるに、延寶元祿の金澤圖に、牛右衛門橋の邊を都て本多安房下屋鋪とあり。故に安房殿町とも呼びたるなるべし。然るに寶曆九年の火災後本多氏の下邸地内を上<sup>ッ</sup>地に命ぜられ、茨木左太夫の邸地に賜はりたり。故に文政四年町名改革の時、丸田町と町名を立てたりしかど、明治四年四月戸籍編成の事に依りて、町名取調べの際、丸田町の町名を廢し、油車の舊稱に復せり。

○岩谷牛右衛門舊邸

舊傳に云ふ。昔藩士岩谷牛右衛門と云ふ人、牛右衛門橋の

邊に邸地ありて、爰に居住せしかど、後故ありて祿を辭し、當國を退去せり。其の舊地は後に本多安房守下邸の地内と成り、此の地に則ち下邸の建物を建て、岩谷氏の舊邸なるを以て、右下邸の建物をば世人岩間屋と呼べり。岩谷の苗字はいはまやと呼べるゆゑなりとぞ。萬治二年小松附諸士の金澤に戻りける頃にや、この地邊藩の用地と成り、本多安房へ代地を手木町口にて賜はる。依りて岩間屋の下邸なる建物をも彼の地へ移せり。故に彼の建物をば、世人舊名に據りて、岩間屋と呼べり。さて油車の舊地は、諸士の邸地に賜はるといへり。按ずるに、岩谷牛右衛門は國初の頃の人なるか。慶長以來の土帳に、其の名所見なし。その子孫も残らざりしゆゑに、岩谷の苗字を稱する人なし。

○茨木町

此の町は、藩士茨木氏の邸宅ありし故に名づく。茨木氏は、元祖源五左衛門以來堂形前葛卷氏の隣地に邸地ありて、數代こゝに居住の處、寶曆九年火災の後火除地と成る故、此の地邊の諸士に移轉を命ぜられ、翌十年五月右替地として、本多遠江守下邸の地内にて上<sup>ッ</sup>地を命ぜられ、坪數九百餘